

3 解剖・生理学について、答えなさい。

骨盤の動脈の走行について、前面からみた解剖模式図を描きなさい。

語群の血管の位置と大動脈からの分岐経路を必ず示しなさい。(数字で図示可)



(語群)

- ① 子宮動脈
- ② 大腿動脈
- ③ 卵巣動脈

▲ 4 月経周期が32日の女性の場合、月経初日を1日目とすると、排卵日は第何日目か。

5 非妊娠女性の正常診察所見はどれか。 ()

- (1) 膣分泌物は淡緑色泡沫状である。
- (2) 子宮は後傾後屈である。
- (3) 子宮は鶏卵大に触れる。
- (4) 子宮頸部の可動性は体部に比べて良好である。
- (5) 卵巣はくるみ大に触れる。

6 正しいのはどれか。 2つ選べ。() ()

- (1) 妊娠反応は尿中hPLの高値を反映したものである。
- (2) 妊娠中の血圧は上昇する。
- (3) 妊娠中のヘモグロビン濃度は上昇する。
- (4) 妊娠中の血中クレアチニン濃度は低下する。
- (5) 赤色悪露に引き続き褐色悪露がみられる。

7 正常所見に○、異常所見に×、をいれなさい。

- (1) 妊娠8週で超音波検査上胎児心拍動を認める。 ()
- (2) 妊娠20週で胎動を自覚できない。 ()
- (3) 妊娠28週で胎児推定体重が600gである。 ()
- (4) 妊娠30週で羊水指数(AFI)が10cmである。 ()
- (5) 妊娠36週で児頭大横径(BPD)が90mmである。 ()

▲ 8 胎児循環で酸素分圧が最も高いのはどれか。 ()

- (1) 右心室
- (2) 動脈管
- (3) 上行大動脈
- (4) 下行大動脈
- (5) Arantius静脈管

9 先天異常の診断を行う妊娠時期と方法の組み合わせで正しいのはどれか ()

- (1) 10週 : 羊水穿刺
- (2) 12週 : MRI
- (3) 14週 : 胎児血採取
- (4) 20週 : 超音波検査

(5) 30週 : 絨毛採取

10 分娩の前駆症状として誤っているのはどれか。

2つ選べ。() ()

- (1) 胎動の増加
- (2) 子宮底の上昇
- (3) 子宮頸管の熟化
- (4) 胎児先進部の固定
- (5) 血性粘液性の膣分泌物

11 正しいものに○、誤っているものに×、をいれなさい。

- (1) 陣痛周期2分は過強陣痛である。()
- (2) 妊娠37週で破水した場合を前期破水という。()
- (3) 胎児が娩出してから胎盤娩出までを分娩第2期という。()
- (4) 第1頭位の場合、第2回旋で児頭は反時計方向に回る。()
- (5) 頭位分娩の場合、第3回旋は胎児の肩甲の分娩機転による。()

Ⅲ 不妊症・不育症について、答えなさい。

▲ 1 不妊症の定義を述べなさい。

2 産褥無月経で正しいのはどれか。

()

- (1) 無排卵となる。
- (2) 授乳によって期間が延長する。
- (3) ゴナドトロピン分泌の亢進による。
- (4) 血中オキシトシン濃度の上昇による。
- (5) 血中プロラクチン濃度の低下による。

3 不育症の原因となるのはどれか。

2つ選べ。() ()

- (1) 染色体異常
- (2) 高プロラクチン血症
- (3) 副甲状腺機能低下症
- (4) 抗リン脂質抗体症候群
- (5) 子宮腔癒着(Asherman症候群)

▲ 4 クラミジアが不妊症の原因となる病態メカニズムを説明しなさい。

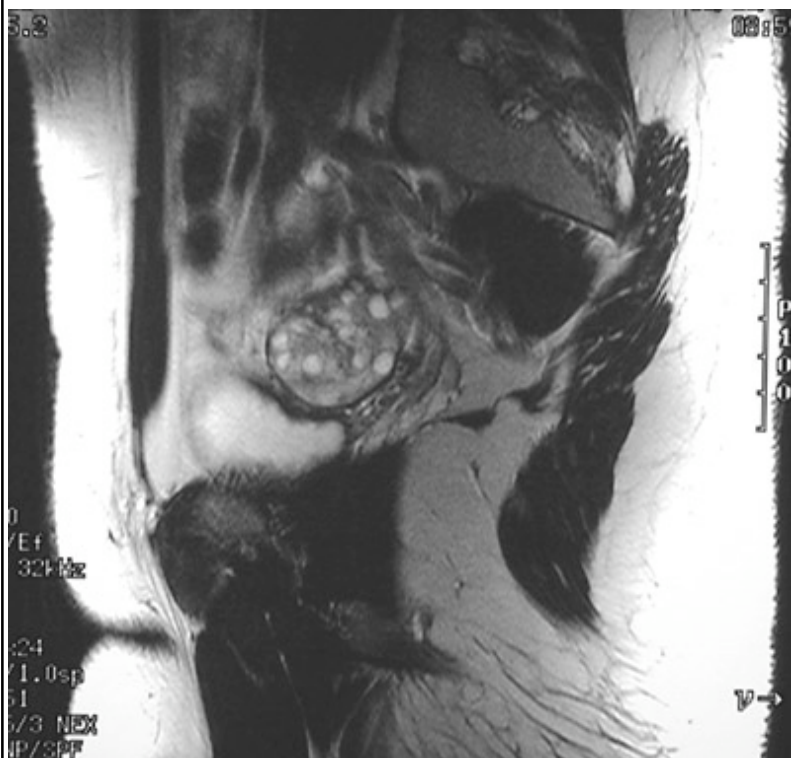
Ⅳ 発達ユニットにおいて、あなたが興味をもって調べた、医学研究の成果について、説明しなさい。(回答欄が足りなければ、裏へ)

V 症例を読んで設問に答えなさい。

- 1 25歳の女性。妊娠28週の妊婦健康診査で、初めて血糖高値を指摘され、来院した。
母親が糖尿病である。
身長156cm、体重60kg。
尿所見：蛋白(-)、糖2+、ケトン体(-)。食後2時間血糖172mg/dl、HbA1c 6.8%。
眼底に異常を認めない。
治療薬として適切なのはどれか。 ()

- (1) インスリン
- (2) チアゾリジン薬
- (3) ビグアナイド薬
- (4) スルホニル尿素薬
- (5) α グルコシダーゼ阻害薬

- 2 30歳の女性。不妊と月経異常とを主訴に来院した。初経は13歳で、月経周期は60～90日と不順。
身長158cm、体重70kg。両下肢に多毛を認める。基礎体温は、低温一相性。子宮卵管造影と夫の
精液検査とは異常を認めなかった。骨盤の矢状断MRI画像を示す。



正しいのはどれか。

2つ選べ。 () ()

- (1) 高FSH血症である。
 - (2) 男性化徴候を認める。
 - (3) クロミフェンは無効である。
 - (4) 卵巢楔状切除術が第一選択である。
 - (5) ゴナドトロピンで卵巢過剰刺激症候群を来しやすい。
- 3 28歳の初妊婦。下腹部痛と性器出血を主訴に来院した。
最終月経開始日から起算して妊娠7週3日。
現病歴： 21日前、市販のキットで妊娠検査を行ったところ陽性だった。3日前から左下腹部の重苦しい
痛みを感じていた。来院当日朝、少量の性器出血を認めた。下腹部痛の増強は認めない。
妊娠悪阻症状はない。
既往歴・生活歴・家族歴：特記すべきことはない。

月経歴:周期28日型、持続5日間、中等量、月経痛は認めない。

現 症: 意識は清明。身長158cm、体重45kg、体温37.3℃、脈拍76/分整、血圧98/72mmHg。

腔鏡診で外子宮口から中等量の出血の持続を認める。内診で子宮は前傾前屈、やや腫大し、やや軟、軽度の圧痛を認める。左付属器領域に軽度の圧痛を認めるが、腫瘤は触知しない。

検査所見: 尿所見はタンパク(-)、糖(-)。尿hCG検査で陽性。経腔超音波検査で子宮腔内に内膜の肥厚を認める。胎嚢は認めない。腹水や腹腔内出血は認めない。両側付属器に明らかな腫瘤を認めない。

考えにくいのはどれか。

()

- (1) 正常妊娠
- (2) 進行流産
- (3) 不全流産
- (4) 稽留流産
- (5) 子宮外妊娠

4 28歳の初産婦。妊娠39週時に少量の性器出血と下腹部痛とを主訴に来院した。

陣痛間欠は3分で、発作は40秒である。

最初に行うのはどれか。

()

- (1) 尿検査
- (2) 血圧測定
- (3) 血球検査
- (4) 胎向診断
- (5) 胎児心拍確認

5 33歳の初産婦。妊娠39週3日。陣痛発来を主訴に午前10時に来院した。妊娠経過は順調である。

既往歴・家族歴: 特記事項なし。

現 症: 身長162cm、体重62kg、体温36.7℃

Leopold診察法第2段で大きくて板状の塊を右手に触れる。腔鏡診で、子宮口から少量の出血を認める。子宮口は口唇状の軟らかさで中央に位置し、2cm開大しており、展退度は60%、児頭下降度はSP-2cm。

検査所見: 血液所見は、赤血球360万、Hb 11.5g/dl、白血球10000、血小板22万、CRP 0.8mg/dl。

① Bishopスコアは何点か。

()

- (1) 0
- (2) 3
- (3) 6
- (4) 9
- (5) 12

入院後、陣痛は次第に増強し、午後3時に自然破水した。内診で子宮口はほぼ全開大、児頭下降度はSP+1cm、矢状縫合は斜径に一致し、先進する小泉門は母体の左側に触れた。

② 先進部の位置はどれか。

()

- (1) 骨盤入口部
- (2) 産科真結合線上
- (3) 骨盤闊部
- (4) 骨盤峡部
- (5) 骨盤出口部

引き続き、児頭はSP+4cmまで下降したが、胎児心拍数モニタリングで90bpmの徐脈が5分間継続した。陣痛間欠は2分で、発作は60秒である。

③ 対応として適切なのはどれか。

()

- (1) 酸素投与
- (2) 体位変換
- (3) 子宮収縮薬投与
- (4) 子宮収縮抑制薬投与

(5) 吸引分娩